# 山形県民教連通信

http://www.asahi-net.or.jp/~gy6e-kjm/　2018.03.31　No.64

Contents

巻頭言「胸躍らせる新しい出会いを」　…1
東北民教研「茂庭集会」のおさそい　…1
冬の学習会　講演記録　…2
冬の学習会　分科会報告　…3～7
冬の学習会　参加者の感想から　…8

山形県民間教育研究団体連絡協議会　通信
＜発行人＞ 山形県民教連事務局
〒990-0044 山形市木の実町12-37
県教組山形地区支部内
TEL/FAX 023-631-2112/2126
E-mail yamagata@yamagata-kenkyouso.gr.jp
＜編集人＞ 鬼島 悦雄 kijima@e.email.ne.jp

## 県民教連「冬の学習会2018」１月13日(土) ヒルズサンピア山形

## 多くの若い参加者で、充実した学びに！

### 巻頭言

## 胸躍らせる新しい出会いを
### －県民教連冬の学習会総括－

県民教連会長　早坂　久佳

2018年の冬の学習会は、昨年の参加者をさらに上回り65名となりました。20代の教職員の参加が増えているとても良い傾向が続いており、民教連の果たす役割がさらに高まってきています。それで、講演に30代の若い講師を迎え「スクールカースト」という新たな視点からいじめや不登校の課題を見直す機会を設けました。さらには、各分科会の運営も若い教職員のために基礎講座やワークショップなどの内容を工夫していただいたことに感謝申し上げます。

さて、今次県民教連総会で学校現場の声を集めることが決まりました。というのも、学童の先生や父母から、国や県の学力テスト体制で宿題が多くなり子ども達が悲鳴を上げているという声が届いたからです。確かに、授業で学んだことの復習ないし習熟問題ならそう負担にはならないのですが、そこで理解できていない子が増えているのでしょうか。それとも日常の宿題に加え、学力テストの過去問を宿題に出されているのでしょうか。とにかく学年毎のカリキュラム以外の物が入ってくると授業が進めなくなります。だから宿題で終わらせてしまうからなのでしょうか。いや、B問題対策なら宿題で終わるわけがありません。かなりの時間を費やして答え合わせや解き方の解説をしているのではないでしょうか。これでは余裕のないカリキュラムになり、先生方も疲弊させられ

## 第67回東北民教研「茂庭集会」に参加しよう！

■日 時　2018年　8月10日(金) ～12日(日)　　■会 場　仙台市太白区 茂庭荘

＜茂庭集会テーマ＞「今こそクリエイティブな教育実践を」

＜集会の主な内容＞

○講演「未定（新学習指導要領の問題点など）」　講師　**氏岡　真弓**　さん（朝日新聞編集委員）

○各教科の分科会・特別分科会・実践講座・ワークショップなど

詳しくは、６月下旬発送の集会案内をご覧ください。

ているのかもしれません。それでも、本集会で青年教職員や学生の参加者は、目をキラキラさせて講演に聴き入ったり、教具づくりでは手際よく製作に励んだりしていましたから、やはりアンケートで年代毎に声を集めていく必要があると感じました。

２月に入ってある小学校で行われた一日入学時に、就学予定の園児が緑色のクレヨンでミサイルを載せたトレーラーを描いていたという話を聞きました。北朝鮮のミサイルだそうです。過剰に危機を煽る商業マスコミの北朝鮮脅威が、小さな子どもにも潜在的に入りこんでいるようです。

18歳の選挙権が成立してから若者の右傾化が話題になりますが、安倍政権の集団的自衛権を授業で取り上げ話し合いをさせた高校教職員が処分され、そのニュースが全国に流れました。

「少数を脅すと、周囲は忖度で沈黙するか従順に服す」という手法を使って、現政権にとって不都合な指導を押さえ込んだようです。これでは戦前の治安維持法と同様です。「政治的中立を謳いつつ、若者の自由闊達な論議を奪い、情報操作が入りやすい環境を作る」この手法が、先の衆議院選挙において若年層の自民党への得票率が多かったことから、功を奏したと自民党自身が総括しています。

2006年の第一次安倍内閣で変質させられた教育基本法が、今度の学習指導要領に完全網羅されています。財界と右翼団体である「日本会議」の要請が色濃く反映され政治的に改悪されたもので、英語と道徳の教科化をはじめ、プログラミング教育や銃剣道の必修と続きます。良識のある人なら誰もがなるほどと思われるはずです。

若者は、メディアやナショナリズムに乗りやすいという説もありますが、「保守化と右傾化は、教科書からやってくる」は、もう目の前に迫っています。教育基本法を元の1947年制定教基法に戻す運動がなかなか浸透していませんが、これを実現するまでは、教職員が子ども達に責任を持って、良心と真実で盾になるしかありません。でも一人一人の闘いでは敵いません。だから私たちは集まって、何が本物か？その事実の中の真実を求めながら教育とは何かを問い、前に進むしかありません。仲間とともに学び支え合える民教連運動に参加することで教職員としての力を高めていってほしいし、私もそうしたいと改めて決意した学習会となりました。

## 講演の記録

# 「なぜいじめはなくならないのか？」
## ―スクールカースト という階層関係―

講師
鈴 木　翔 さん
（秋田大　大学院
理工学研究科助教）

１．はじめに先生から

鈴木先生曰く、専門は教育社会学で、教育や子どもをとりまく暗黙のルールを解明する学問です。研究主題は、「思春期の同輩集団の交友関係」で、友だち関係・恋愛・いじめ・学校適応・スクールカーストなどがそこに入ります。教育病理のひとつに「スクールカースト」の問題があります。子どもたちが学級において、友人関係の序列化を余儀なくされる現象で、それぞれの立ち位置に沿った行動や振る舞いが強制されるばかりでなく、イジリやイジメの要因とさえ言われます。教師の生徒指導にも大きな影響をもつと指摘されている「スクールカースト」にどう向き合うか？　一緒に考えていきましょう。

２．「スクールカースト」とは何か？

最近、小学生や中高生がクラスメイトを値踏みし、「ランク」付けしているということが言われています。多くのエッセイや小説、マンガの作品にも描かれています。こうした作品を読むと、小説やマンガの中でクラスメイトの間に「ランク」付けのようなものが存在して、その「ランク」を上げたり下げたりすることは、あたかも説明不要で、当然のことのように起こりえているような感覚になってきます。

クラスメイトのそれぞれが「ランク」付けされている状況を「スクールカースト」と呼んでいます。「スクールカースト」とは、クラス内のステイタスを表す言葉として、近年、若者たちの間で定着しつつある言葉です。上位から「一軍・二軍・三軍」「Ａ・Ｂ・Ｃ」などと呼ばれます。

「スクールカースト」が、児童生徒の学校生活に与える影響として、二つ指摘されています。一つは、「スクールカースト」地位の中で、「下位」におかれた児童生徒は、クラスメイトから低い存在、つまり目下の存在だとみなされて、イジメの標的になりやすくなること、もう一つは、たとえイジメにあわなかったとしても、自分に自信をなくし、学校への適応に大きな影響を及ぼすことです。

３．「スクールカースト」の世界

小学校の時と、中学高校の時では、「スクールカースト」の認識が変化します。小学校時は、「個人間」の差として認識され、「上位」の子は、「運動神経がいい子」「遊びが上手な子」が「人気者」として認識されていて、クラス全体から排除されたり、いじめられたり嫌われたりするような特定の児童を、「地位の低い子」として認識されている。しかし、中学校以降になると、同学年の生徒の間にある「地位の差」を、所属するグループ間の力関係の差であると捉えることが多くなる。

「上位」のグループは、学校生活を有利に過ごすことができる。グループに属していない生徒は、「下位」のグループからも見下される。「上位」のグループには、様々な特権が与えられている。「上位」のグループは「結束力」があり、クラスに大きな影響力があるため、「下位」のグループは彼らに「恐怖心」を抱く。地位は固定的で、努力では変えられない。教師も「スクールカースト」に従って行動している。教師は、「スクールカースト」を肯定的に捉えている。

４．おわりに

教室の中で自然発生的に形成される「地位」の上下、「スクールカースト」という状況が、学級学年にあるとして、そこに介入できる唯一の大人としての、我々学校の先生は、どのように関わるべきか。そして、鈴木先生のお話に出てくる先生達は、「スクールカースト」を能力の序列ととらえ、児童生徒側が認識しているものと大きな差はないとしているが、はたしてそれでいいのか。

我々は、担任や担当になったときは、児童生徒の一人一人の成長発達の様子と、学級学年の全体の力やいろいろな人間関係などを把握、分析し、どのように学級づくり・学年づくりを行っていくか方針をたてて、具体化していく。その仕事、活動を進めていく中で、児童生徒一人一人が人間として成長し、学級学年の集団的な力が高まっていくことで「スクールカースト」は、普遍的なものでなく、変わっていくもの、乗りこえられるものとして見えてくるがどうだろうか。

（文責　岩城　充）

# 分科会報告

## 「国語・作文」分科会

近野　享子（山形作文の会）

実践講座

「生活を見つめ書き綴らせることの大切さ」

山形作文の会　奥山睦子

戦前・戦後の東北・山形の教師たちが生活綴り方教育を通して目指してきたものと果たしてきた役割について、実際の指導の仕方についての講座でした。実際の指導では、子どもたちとの出会いの場面から、日記を書かせる指導、作文の書かせ方等、子どもたちの日記や作文を例に挙げて、これまでの奥山先生の実践に基づくお話でした。生活を見つめ考えを書き綴るということが、子ども

たち一人ひとりの成長にとても大きな影響を与えていくということ、学級づくり、親たちとの信頼関係づくりにもつながっていくことを改めて学ぶことができました。

実践報告

「根拠を明確にして意見文を書こう（中学）」

教科書教材の授業の報告ですが、説得力のある文章にするために、１年時に総合的な学習の時間で行った探求活動で学んだことを課題として取り上げました。生徒たちには意見文を支える根拠としての体験と学習があり、限られた授業時間で生徒同士の交流（学び合い）ができるという点でも題材は有効だったと思います。時間と字数に制約があるものの、意見を支える根拠をもっと実感のこもったものにするためにも、自分の日常や体験に引き寄せて、（生身の人間の息づかいが感じられるように）書かせたいものです。

参加者の中に、小学３・４年生の時に奥山先生が担任だったという教師を目指す大学3年の学生が、当時の自分の日記帳と文集を持って参加していて、真剣に話に聞き入る姿がありました。「大学では学べない、『生活を綴る実践』の意義と効果がわかり、これからに生かしていきたいと思います。頑張って教師になります。」と感想を述べて帰りました。

# 「社会科」分科会

田口　忠宣（山形歴教協）

社会科分科会では、「地域の近現代史（平和・人権）に学び、社会科の教材・授業をつくろう」という主テーマのもとに、それぞれの授業実践を持ち寄るという趣旨の下で、展開された。

分科会は大雪などの都合もあり、４名といろ参加者ではあったが、自由ざっくばらんな懇談が出来た。

・「私の教材と授業つくり」の船越さんの報告。高３の地理Ａの授業で、韓国学習を実施した。「イムジンガン」「渤海を夢見て」の２つの歌から、歌詞のチェックをし、1910年～日本による植民地支配から、1953年の「停戦協定」までの年表と地図を使い、朝鮮半島の分断と日本との関わりを考察させた。いくつかのＤＶＤ（映像）を挟み、事実の羅列ではなく、国民（民衆）の姿がリアルに描かれることを狙いにしたものである。授業後の感想文にも、そのことを映した生徒の声が、少なからず感じ取れた。分断によって、引き裂かれた民衆への共感が。

「韓国の学習で何をどう教えるか」は、いろいろなアプローチがある。昨今の様々なメデアをにぎわす韓国情報と歴史的な経緯との“つなぎ”が難しい。生徒たちの国別好き嫌いの調査では、北朝鮮と並んで韓国は嫌いな国の上位にある（2017年・男子高校調査)。日本が東アジアの韓国といかに「共生」できるのかは、今後もていねいに模索する必要がある。

つぎに「世界地理の授業つくりと実践」というテーマでの高１での田□の実践。日々登場するトランプ政権の過激な情報洪水の中で、世界が揺さぶられているので、現代のアメリカをどうとらえ、学習の教材として展開するのかを、実践を交えて展開、提起したものである。

今日生徒たちのアメリカ観は、好きな国の第１位でもあり（また嫌いな国の５位でもあるが・・・）日本との日々の深い関係は、表面的ではあるが把握している様である。そのイメージは総じて、「自由で活発、世界一の経済と文化（スポーツ・音楽等）と軍事力を持つ国」「日本との関わりの

大きい国で、日本が頼りにしている国」でもある。こうしたアメリカ観に授業で、どう対峙して生徒たちに「現代の真実のアメリカ」を教えるかは難しい。

「アメリカの政権を語ることは、世界の平和と戦争を語ることに相当する」という指摘も学んでいるし、本多勝一は「アメリカの建国の歴史の『侵略』は、現代のアメリカの“それ”とも連動している」という。

実践はまず、地理Ａの４社のアメリカに関する教科書の内容分析と生徒の「トランプ論」から始めた。教科書では、各社ともかなりの多いスペースを割いて、アメリカの自然や民族・世界に影響を与える農業･鉱工業などの産業の実態と都市・アメリカンライフを紹介している。しかし、内容では、黒人やヒスパニック、フィードロット、サンベルトなど多くの今日的なキーワードは登場するし、経済的な数値の大きさのみが主である。マイノリテイなどの差別の実態や国民の生活の実態・悩みは見えない。知識の羅列が続く。日本との関わりも「安保による軍事的安定さ・ 日本経済への寄与」を強調している。こうした実態に立ち、アメリカ国民のための授業の内容を考察した。６つの視点の下で実践した。生徒たちの授業後の感想では、従来の生徒たちの盲想が強固とはいえ、トランプ政権への不安や批判が続出し、アメリカへの見直しを示す生徒も多かった。世界市民との連帯や共生こそが目的である。アメリカの動向を冷静に見る姿勢は、微力ではあるが出来たかもしれない。発表学習でも、生徒たちの自主資料は、多彩で発想豊かなものもたくさん見られた。まだまだ改善の余地はあるが楽しみでもある。

## 「算数 **数学**」分科会

山川　貴子（山形数教協）

ワークショップでは、900mlのペットボトルを使って「平均水そう」を作りました。言葉の説明だけでははっきりしないことも、教具を見れば一発でスッキリ理解できる。そして子どもたちの顔が輝く。それが教具の魅力です。だから教具作りはやめられません。ペットボトルは早坂先生が何ヶ月も前からこの日のためにこつこつ集めてきたものでした。感謝！

続いて、特別支援学級の算数レポート（山川）の完結編では、折り紙を“色の順番”で揃えていくＫくんの姿から、Ｋくんには色を入り口としてさまざまなものを整理していく力があると気付かされました。

早坂先生のレポート「わくわくする算数の授業」をもとにした話し合いからは、

「重さ」の本質は
「目に見えない量である」ということ
↓
なんとか数値化する＝
目に見えるようにすることが授業のねらい
↓
本質に迫るためにを準備するかが大切

というまとめが出されました。これはすべての授業に通じるものと言えると思います。

若い先生方２名の参加もあり、逆に新しい力をもらえた分科会になりました。

## 「生活･理科」分科会

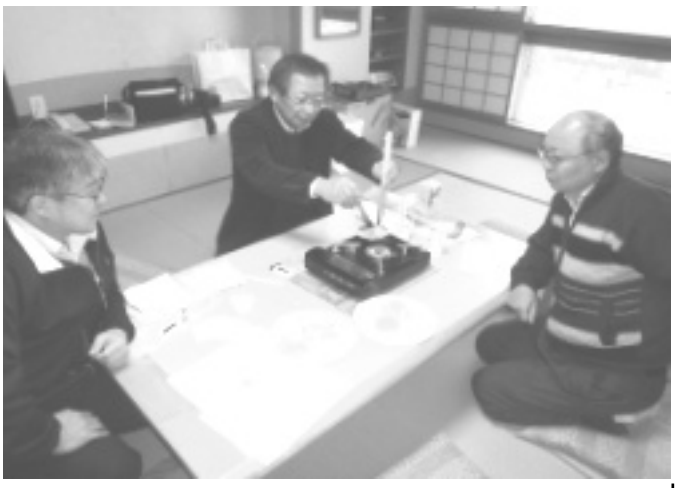
鬼島　悦雄（科教協山形）

生活科・理科の分科会では、「学級経営に役立つものづくり　あれこれ」と題して、ものづくりのワークショップをおこなった。

＜失敗が少ないカルメ焼き＞

ここでは、カセットコンロとなるべく大きなお玉を使い、砂糖液の温度を正確に測ることにより、失敗せずにふんわりと膨らんだカルメ焼きを作ることができる。正確な温度を測る手立てとして、料理用のデジタル温度計を使うのがポイントになる。

参加者と一緒に何度も繰り返しカルメ焼きを作ってみたが、初めての場合でも、ぜんぜん膨らまな



いということはなく、それなり膨らんで、おいしくいただくことができた。

学級のお楽しみ会などでは、すぐにコツをつかむ子も出てくるだろう。みんなで楽しく取り組める活動になると思われる。

＜１年生も楽しめるベッコウアメ＞

以前は、アルコールランプ、三脚、金網で作っていたが、低学年でも多人数でも楽しめるように工夫したのが、ホットプレートを使う作り方で、水の量が多すぎないようにスポイトやスプーンを使って工夫している。

参加者と一緒に大量のベッコウアメを作り、分科会後の交流会で他の分科会参加者にも配ることができた。「なつかしい味だ。」と好評だった。

＜楽しい動きのピコピコカプセル＞

身近な材料（クリアホルダー、アルミホイル、ビー玉など）を使って作る楽しいおもちゃ。以前も紹介していたので、クリアホルダーの芯なしで作る方法を紹介した。芯があると薬のカプセルのような形になるが、芯がないと卵のような形になり、これも面白い動きをする。誰がうまく形を作るかなど、クラスで競い合っても楽しい。

短い時間だったが、３つのものづくりを紹介した。参加者は少なかったが、気ぜわしい学校生活の中にこんな楽しみのある時間が持てたらいいなと思えたワークショップだった。

## 「生活指導」分科会

大場　理之（山形生研）

分科会参加者は１６名で、青年教師も５名参加してくれました。全体講師の鈴木翔先生も参加していただきました。

前半は、全生研常任委員の関口武さんから、「どの子も活躍できる学級集団づくり」というテーマで実践講座をしていただきました。関口さんが受け持った３年生のクラスにいる不登校傾向の３名の子どもの背景を探りながら、彼らの要求をもとに学級を変えていく実践でした。

学級開きや学期まとめの持ち方を具体的に示しながら、子どもたちが安心できる友達を一緒の班にし、彼らの要求から「水風船バトル」や「七夕まつり」「ダンスクラブ」などに取り組み、活躍の場を通して居場所をつくり、少しずつ登校できるようになった実践でした。

もう一つは、班長会を引っ張っていた子どもたちが新しい班長を支援していくことで、新しい班長会が力をつけていく実践を話していただきました。

後半は、田川サークルの鈴木淳一さんの「ＫとＫのトラブルの背景は？」というレポート分析を行いました。なかなか人の気持ちを理解できないＫ１と学習障害ですぐにカッとなって興奮してしまうＫ２が起こすトラブルについて、鈴木さんが班長会で話したことや児童会・学級で取り組んだ実践を発表してもらい、班長会や学級でどのような対応をしていくかを話し合いました。

「両方の価値を学級全体で話し合ってみる。」「Ｋ１、Ｋ２は学級に問題提起をしてるのではないか。価値論争してみるのはどうか。」などの意見が出された。

関口さんと鈴木さんの実践を通して自分の学級を振り返ることができた。若い方の発言がなかったので、班をつくって班討議形式にすれば、自分の考えや疑問をもっと出せたのではないかと感じた。今回の学習をそれぞれのサークルで次の学習へつなげていきたい。

# 「特別支援」分科会

漆山　美子（全障研山形）

今回は、「特別支援ケース会議におけるホワイトボード会議の活用」についてのワークショップを企画しました。このワークショップを企画した理由は、校内委員会を充実させるにはどうしたらいいのか、という悩みを持っていらっしゃるコーディネーターの先生がたくさんいることがわかったからなのです。校内委員会を身近なものにしていく１つの方法としてホワイトボード会議を活用していただけたらと思って、本校で行っている方法を体験していただきました。

ホワイトボード会議というとやり方があって難しそうと感じている方もいましたが、あまり難しく考えないで、コーディネーターの方がやりやすい方法で始めてみてはどうかと提案しました。そうすると、抵抗感なくできそうだという反応がありました。参加者から事例を提供していただき、事例検討をしながらホワイトボード会議を行ってみましたが、今の問題を整理し、支援の方針を考えることができました。

ホワイトボード会議を体験してもらった後は、参加者から日頃の悩みについて話があり、参加者みんなで考えていきました。コーディネーターになったが、どのように校内委員会を進めていったらいいのか、仕事を進めていったいいのか…など。

コーディネーターが１人しか指名されていない場合だと、どうしても１人で抱え込みがちになりますが、コーディネーターは「つなぐ」役割であることをアドバイスしたところ、少し気持ちが軽くなったとおっしゃった方がいました。特別支援におけるケース会議は、いかに関係者を集めてチームで対応していくことかが大切だと思います。短時間、５分、１０分でもいいので、集まってみるところから始めてみてください。

# 「心と身体」分科会

東海林　仁（事務局）

・新年度からいよいよ学校現場に立つ学生（山大地教養教別科）のみなさん６名と青年教師２名、講師の長沢裕美先生

・児童生徒が自分の良さを再発見し，勇気と自信を持ってもらえるようにと，ハート型のカード作り
・カードの両面は短所を長所にとらえる「リフレーミング」の文言，例えば「落ち着きがない」は「行動的でポジティブ」
・そんな勇気づけのハートカードを透明ポケットにたくさん入れ，めくっては短所も長所に変換していけるんだと前向きに後押し。
・掲示物づくりを通し，長沢先生の青年養護教諭時代の面白おかしいエピソードをお聞きしながら，あっという間の３時間が過ぎていきました。

# …参加者の感想から…

## ＜講演＞

○「スクールカースト」に興味があったので参加させていただきました。今どきの子ども達の考え方、価値観など、おどろくことがたくさんあり、それが楽しくもありました。年をとると、偏った見方しかできなくなっている自分に気づくこともできました。
　今回参加して、とても有意義な時間となりました。本当にありがとうございました。
＜山形・小学校＞

○「スクールカースト」という実態をしっかりと把握して、その集団の中でも苦しんでいる子を助けていくことが教師の役割なのだと思いました。

○スクールカーストの話、とてもよかったです。私の知らない子どもの心が見えてきました。ありがとうございました。　＜東南村山・小学校＞

○講演会では、普段目にしている生徒達の様子は、ほんの一部であり、環境が変わればまた違う一面を見せてくれるのかなと思いました。＜中学校＞

○スクールカースト（階級）や学級のピラミッドの考え方と、自分の学級を比較して考える事ができました。　＜田川・小学校＞

○講演は、一つの参考となったが、何ら展望のない話であった。その背景、人間の本質、時代（政治）の変遷･･･、植松先生の言われた非民主的なものを、どう「民主主義＆人権」と言われるものに、どういう方向・視点で追求し実践していったらいいのかが、明確に見えてこなかった。もっとも、その実態（カースト）をもとに、我々が考えていかなければならないという大きな課題を示してくれたとみればいいのかな。

## ＜生活指導＞

□経験を多く積まれた先生方、専門的に研究をしている先生の話や討論を聞くことができる貴重な機会でした。
　今年度、教員一年目を経験し、課題を抱える子どもに多く出会いました。悩み続けた一年でしたが、ワークショップの中で共感できることが多く、自分の学びも多くあったことが分かりました。二年目もがんばっていこうと思います。ありがとうございました。　＜村山・小学校＞

□リーダーを育てる立場（担当）をしていますが、リーダーが果たして成長できる土壌を作れているのだろうかと思います。フォロワーの存在が大事であるが、今の子ども達の状況をきちんと把握した上で、他の教員とも話しながら、生徒と向き合っていきたいと思います。　＜中学校＞

□実践例がとてもためになった。来年から教師となるため、生かしていきたい。子どもの価値観を生かして、のびのびした子どもを育てていきたい。
＜北村山・小学校＞

□目の前の子ども達の思いをくみとっていくことが大事だと感じた。　＜北村山・小学校＞

□分科会での関口先生の実践に、未来と希望を感じました。優れた人間性、積み重ねてきた実践技術力のすばらしさを思いました。引き出しの宝庫を、もっと全開に広めて（伝えて）いってほしいと思いました。

## ＜特別支援＞

◇特別支援のワークショップは、今かかえている悩みに、明瞭にアドバイスいただき、勇気がわいてきました。本当は、心が折れていたのですが、また月曜日から少しずつやってみようと、明るく思えるようになりました。本当にありがとうございました。　＜東南村山・小学校＞